

『女性観の変遷』(1)

杜 芳 琴 著
山 口 眞 訳

まえがき

歴代の中国人は心の中で一体いかに女性を認識し扱ってきたのか。女性観において男女はどのような相似性と相違性があったのか。女性観は中国の歴史、中国の伝統文化とどのような関係があったのか。中国文化の各要素、すなわち思想学派(儒、法、道諸家)、宗教(仏教、道教、民間宗教等)、一般の風俗習慣は各派の女性観をどのように逐次形成していったのか。またどのようにそれらは相互影響、矛盾、浸透、融合しながら変化をもたらしたか。過去的女性観は現代の中国人の女性観にどのような影響をもたらしているのか。この一連の問題は時代意識を持つ女性の関心だけではなく、思想や文化の研究に努力し、女性問題に関心を持っている男性にとっても興味をもたせる問題である。

女性観は、実際には男女両性に関する観念であり、歴史的産物である。中国歴代の女性観は中国の歴史的土壌に根づいた中国の家父長制社会、封建君主制度、小規模経済の産物である。それは男尊女卑の女性観と女性を束縛する道徳観の二つの面に集中的に表れている。この観念は深く世代を越えて男女の脳裏の中に烙印されている陳腐な考え方で、根深く頑固に規範化、習慣化されている。人々は因襲的な重い負担に

背を向けていたが、人類共通の発展の過程において少しずつ進歩してきた。歴史は後戻りすることは出来ないが、歴史の精神的沈澱物を整理、取捨選択、改革する後世の人々は巨大な代価を支払われなければならない。その目的は新しい時代の我々男女が一種の精神的離脱と思想的解放、個性の健全な発達とよき人格の形成を獲得することにある。この本は女性観の領域において歴史の沈澱物の整理作業を試みようとしたものである。如何に取捨選択、改革するかに関して、読者は自然に綿密に考えることが出来るだろう。

前編

原始的男女両性観 一自然的平等

「古代の初め(遂古之初)」,民衆の生活はどの様は状況だったか。屈原は<天に対する質問(天問)>を真正面から出した。「古代の初め,誰が人間の真理を教えてくれたか? 天と地がまだ形をなさず,何によってそれを考えたか」1000年後,柳宗元は「我得ずして知る(吾不得而知)」と語り,これは難解な謎であると宣言した。「天地果して初無きか? 吾得てこれを知らざるなり。先人果たして初め有りや? 我得てこれを知らざるなり」¹⁾。現代科学は人々に対して人類

訳者まえがき

これは1988年に編纂された「女性学研究」叢書中の杜芳琴著「女性観の変遷」の前編と後編第2章の一部を翻訳したものである。著者である杜芳琴女史は天津師範大学古籍研究所副主任,同婦女研究中心常務副主任であり,中国の伝統性別文化および生育文化史研究の第一人者である。東アジアの儒教文化圏の女性問題は2000年にわたり中国の儒教思想の影響を深く受け,現在もなおこれがこの地域の女性解放の進展を妨げている。中国では同じ頃,1989年に中華全国婦女連合会編著「中国婦女運動史(1919—49)」が建国40周年事業として編纂されている。

進歩の謎を提示したが、炎黃子孫の祖先の生活様式と当時の男女両性の生活と観念を具体的に考えることはまだよく解ってはいない。我々は祖先から伝えられてきた神話伝説と近代の考古学的成果の力を借りて、検討していくことしか方法はない。さらに、これらの2種類の資料は我々の考察を新石器時代の祖先の生活まで検討させることが出来るが、それ以前の古代のものについては現代でもまだ謎につつまれている。

神話は自然と社会の関係について祖先が無自覚に加工した人類の思想の自然的・自発的な反映の一つの形式である。中国における古代の神話と伝説は大体次のように分けることが出来る。即ち、女媧を中心として三皇の伝説と黃帝を中心とする五帝の伝説である。我々は伝説から女媧、伏羲、神農の「三皇」を取り上げ、黃帝、顓頊、帝嚳、堯、舜を「五帝」という言い方をとった。大体において言えることは、三皇時代は依然として母系制社会に位置し、五帝は既に父系制社会から部落共同体へ移り変わった段階であった。しかしこの二つの時期における女性の地位と男女の観念は一体どのようなものであったのか？

第1章 三皇—女性尊重崇拜時代—母系制社会

エンゲルスは母系制社会において女性は比較的自由な地位に位置するだけでなく、その上高い尊敬される地位にあったと指摘した。これは三皇時代における神話伝説と考古学の発掘によって検証することができる。

1. 女性の創造力の謳歌

(1) 女性、自然征服の英雄

女性尊崇の観念は「女媧補天」の神話伝説のなかにその様子を伺うことが出来る。

「昔、黃帝の天下を治るや……しかれども、なお未だ處戎（伏羲）の道に及ばざるなり。往古の時、四極廢れ、九州裂け、天は兼ねおよばず、地はあまねく載せず、火はらん炎として滅えず、水は浩洋として息まず、猛獸は顓民を食

い、」²⁾。

当時、自然災害が続々起こり命の弱い祖先に挑戦した：天は落ちて地は陥没し、干ばつと洪水が同時に起こり……猛獸は祖先達を欲しいままに食べる。これはまさに原始人の劣悪な自然環境と低い深刻な生産水準の状況である。このような危険な情勢のもとにあって、「女媧」は名声が高く、特別な能力をもって、世界の人々を救った英雄であり、大自然の挑戦に応ずる勇氣をもっていた。女媧は天地を正常にし、災害を除き、猛獸を殺し、人々を安泰にした。「列子・湯問」編の中にこのような「女媧補天」の神話が保存されている。すなわち「女媧は女神で、五色の石を練って天を補い、亀の足を切って、4つの柱をつくった。また顓頊と共工が帝のために争い、共工が負け、怒って不周山にぶつけた結果、「天は西北に傾き」、「地は東南の方向に押しやった」。これによって女媧は五帝以前の自然を征服した象徴であったことが解る。女媧は救世と世界統治の象徴であり、また女性の偉大さ、崇高の象徴であった。

(2) 世界の創造者・人間の創造者としての女性

女媧は天地を創りなおし、歴史を変化することの出来た英雄であったばかりでなく、人類の創始者の母であった。屈原は「天問」の中で「女媧は体があり、誰が彼女をつくりだしたか。何ぞ天に戯れ地に抑う。それ誰おか畏こくする」。女媧は人間の創造者であり、あのような女媧の本身は誰が創ったのであろうか。山海經では「神あり、10人、名は女媧の腸（はらわた）化して神となり……」³⁾と説かれ郭璞は次のように「女媧、古くから存在している神女で皇帝である」と注をつけている。先秦時代より女媧創造神話が伝えられ、この種の神説伝説は東漢時代まで未だ残っていた。ただこれは改変され、その本来の様子は変えさせられ、その後の時代の階級社会の観念を挿入させられている。女媧は世界を救済し、世界を整理する象徴であり、偉大な女性であり、崇高の象徴であったことが解る。女媧は世の中が寂しく人間がいないとみたら、

その辛苦を癒すため泥を用いて人間をつくったと伝えられている。女媧は力が足りないとき一本の大縄を用いて泥水のなかを攪拌し、跳ね返した泥の点は多くの人々を創る。このように泥をこねて創られた人は少数の富裕な人になり、小さな泥が変化した人は貧乏人になった⁴⁾。伝説をもとに本を著すとき、階級的偏見をすてて、女媧が人間を創るという本来のことは見てみれば、母系制社会における人々の母性尊重がよく反映されている。女性の二つの生産、すなわち自然を改造し人類の環境を創造する生産と人の命を繁栄生産することが核心であるため、社会的に崇拜と尊敬が受けられた。

(3) 創造発明の神としての女性

女性はまだ新技術と人類の発明創造の始祖である。例えば女媧の発明した「煉五色石」は近代の研究によって現代技術にもとづく古代最初の「煉銅術」であることがわかった。「五色石」は一種の鉱石、孔雀石である。また「山海経」の中に記載されている「欧系の野（糸を吐き出す野原）で一人の女子が木にひざまずいて糸を吐いている」⁵⁾。これは養蚕の神話に関するものである。女性の蚕神が桑の樹の上でひざまずき、少し桑葉を食べながら、糸を少し吐く。これは農桑社会へ移行した後、原始人が養蚕技術を発明した女性に対する謳歌である。当時女性達は全氏族への創造的な貢献によって地位と尊敬を得ていた。功績のあった死んだ女首領達を神霊として仕え、祭り、祈った。紅山文化の最近発掘された牛梁河の女神寺の遺跡から見れば、女神は祭りの核心として尊敬され、このことは原始人の女性祖先崇拜を表している。

(4) 社会生活の支配者

当時、女性は生産、出産の中心であったばかりではなく、社会生活の中心でもあった。母系制社会において彼女達は社会の存在形態、氏族の組織者であった。「淮南子・覽冥訓」の中の「女媧補天」、この一節の文章を詳細に研究してみよう。その中の一句に非常に解りにくい言葉がある。「昔、黄帝は天下を治るや……しかれどもなお未だ處牺氏の道に及ばざるなり」。「處牺氏の

道」はどのようなことを意味しているのか？言われていることは、伏羲氏が天下を治めていたとき、女は功績を立てた。伏羲氏が天下を治めることになったのに、何のために当時最も難しい問題を「女媧」によって解決しなければならなかったのか。伏羲氏と女媧はどのような関係にあったのか？「山海経・海内経」には次のように記載されている。伏羲氏と女媧は古代南方の苗族の人々が信ずる神、すなわち「延維」と名づけられる「人首蛇身、猿のような首を左と右に持つ神」であり、「庄子・達生」篇の中で「委蛇」となった。つまり「媧」と「羲」は統合された名前である。女媧と伏羲は双頭人首蛇身の神であり、実際には古代苗族の先祖の長の象徴である。このような双頭人首蛇身の画像はどの時代でも見つけることが出来る。安陽で発掘された商時代の墓と春秋時代の楚の国の墓、東漢時代武梁祠石室の画像はみな石で彫られた交尾する双頭人首蛇身の画像である。「風俗通」のなかでは「女媧は伏羲の妹」と言われている。しかし一方では二人は夫婦と思われている節がある。このことは本来矛盾するものではない。「原始時代においては姉妹は妻になることができ、これは道徳に合致する」⁶⁾。但し母系氏族及び父系氏族の初期の妻はその後の時代のように男性の命令を聞く必要はなかった。逆に女性は男性に対して平等な地位を保ち、また時には男性よりも高い地位を保っていた。「淮南子」の伝説には遠い過去の事実と後世の観念の間の矛盾を書物に残している。後世の観念によっては、妻は夫によって支配されなければならなかった。そのため「伏羲が天下を治め」、女媧は夫の補佐をしたと言われている。実際には、明らかに女媧が天下を治め、天を補い、地を表し、庶民を救済した実際の社会の組織者であり、時代の実力者であった。もし古代に伏羲氏が天下を治めた確かな事実があれば、それは「女媧」が天下を治めた後、すなわち父系制へ徐々に母系制から変わって行った時のことである。

母系制社会においては世系（家系）の計算、生産活動の管理、財産相続、婚姻制度、居住制

度、全てが母系を中心として存在している。これらは考古学的出土品からも証明することが出来る。母系血縁によって世系を計算することは次の例から証明された。陝西省華県の元君寺29号墓に埋葬された2人の女の子とともに、6件の陶器が葬られていた。すなわち当時は少女が尊敬されており、つまり氏族の相続者が重視されていた。母系制社会においては女性が生産労働の中で主要な中心的な役割を果たしたので、彼女達は生産の収穫物を分配するとき比較的高い待遇を受けていた。墓の副葬物を見れば、それは殆ど女性の方が男性よりも多かった。例えば臨潼亨寨墓群では男子は平均副葬物4件、そして女子は平均約6件、ある女性には更に多くの副葬物をもっていた。居住から婚喪制度をみれば、当時は母系が中心の共居制であり、妻方に住んでいたことがわかる。

西安省半坡と臨潼亨寨の氏族村落の遺跡を考察することにより、同一の氏族は性別により分かれて住む制度があったことが判明した。また結婚して年をとっても性別居住制度によって、未だ母と共に住んでいたことがわかった。仰韶文化遺跡の氏族公共墓地では同性合葬、母子合葬制度が行われ、さらに女性の墓が比較的高い場所に位置していたこと等により、母系制社会の中では年長の権威ある女性が氏族の支配者であり、氏族全ての活動の中心であり、社会の実権者であったことが証明された。

2. 女性崇拜時代

(1) 自然崇拜から見た女性尊重

原始時代であっても、人々は現実の女性だけを尊敬する礼拝の対象とするだけでなく、このような崇拜は自然物の崇拜へと対象を拡大し、また逆に自然崇拜から女性崇拜への現象がみられた。例えば原始人は日、月、星、竜、水、干ばつ等自然現象を全て神格化し、これらの神々のほとんどを人格化した女性の神としている。

「山海経・大荒南経」には太陽女神の羲和があり、彼女は帝俊の妻であり、10人の太陽の息子を生んだ。「大荒西経」では帝俊の妻常羲は12

個の月を生んだと書かれている。つまり彼女は12人の娘の母親である。また「大荒東経」には次のように記載されている。「娘と月の母の国がある」。日月の出没、昼夜の長短の掌握を専門とする女神。「大荒北経」では又干神女魃のことが書かれている。彼女はかつて黄帝を援助し、蚩尤と戦った。また東西南北4つの方位いずれにも昇らせるか、あるいは日、月、昼、夜を司る女神である。このような祖先の自然崇拜は女性崇拜まで及ぼした。この観念はさらに商代へと続いており、商代の人々は日と月は「東の母」と「西の母」と称している。この自然物と自然現象は美しく壮大なために、往々にして美しい感情をもたらししたが、また自然物が欲しいままに人間に害を与えたために、祖先に恐怖感をもたらし原因となった。ただし、その結果全て崇拜に帰することになる。崇拜の対象は自然の移り変わり、当時は最も尊敬される人物に移転された。すなわち母性の化身となった。

(2) 生育崇拜と女性の地位

母系制社会においては、女性崇拜は現在においても女性が人類の繁殖に大きく貢献していることに深く関係している。原始、生産力が非常に低下していた時代においては人間の生存が非常に困難であった。考古学的発掘研究によると山頂洞人（北京人類）の寿命は一般に30歳前後であり、この生育と養育に責任をもった母親（母系）は非常に尊敬された。「山海経」と「天問」にはすべて9人の子の母である女岐のことが記載されているが、当時は多育の神としてあがめ奉られていた。伝説の中で最も古い人類の母親となった女媧は更に「媧皇」として人々に尊敬された。母性に対する崇拜は人々を妊娠した女性と生殖する女性の身体の崇拜へと拡大していった。例えば紅山文化の牛梁河で発掘された妊婦裸体像は当時の人々が崇拜した生育の女神と言われた。

3. 女性—平等世界の自由の女神

母系制社会では、自然が女性に様々な権利を与えた。例えば、人間を出産、養育する権利、

集団生活と生産を組織する権利、但しその時は法律的な人間創造の特権はなかった。その特権は自然が授与したものでしかなかった。女性はただ自然的に権利と義務に従ったのち、すべての社会人から尊敬を得た。その時の人と人との間、男女の間は自然的な平等であり、したがって人々の間も自由な関係にあった。私有制によって生じた支配欲も奴隷狂もなかった。自然平等両性関係の中で最も表現された、重要なことは人身は自由で、自由にふるまうことであった。女媧と伏羲は兄妹で婚姻関係をすることができたし、女媧は結婚しなくても「無性生殖」と「九人の子を生む」ことができた。女性は当時の自由の神であり、また、後の時代の祖先の神である。「女系のこのような独特の意義、父系的身分は、既に確立され、少なくとも承認された一夫一婦制時代では未だ残って長く続いている」⁷⁾。中国の原始社会もこのようなものであり、女性の自由は長く父系制社会まで続いていた。五帝時代ではまた雑婚の習俗が盛んに行われた。例えば、周の先祖后稷のように、ただ母親は姜嫄だといい、父親は誰かわからない。商時代の先祖契の誕生は他の生母簡狄が神鳥の大卵を飲み込んだことによって生まれた。これらの全ては母系制社会において女性を中心とする神話の再創造である。

第2章 五帝時代—父系制社会の確立、女性の歴史的な敗北

五帝時代は社会生活と男女両性の関係が歴史的变化をもたらした節目の重要な時代であった。人類は誕生において、狩猟・採集から牧畜・農業を分離し、第一の波を発生した。伝統的職業の中で優勢な地位を占めていた女性は徐々に牧畜と栽培を得意とする男性に権力と地位を譲った。男性は氏族社会の中でも、支配的地位を占め、世系も次第に男性を中心にして移行し、父系制は母系制にとって変わった。母系制が覆されたのは「女性の世界的な敗北」である⁸⁾。

中国の父系制社会の萌芽は母系制末期に潜伏しており、女媧と同時あるいはやや後の伏羲時

代に既に罟罟を發明した。「結繩時代」と言われる⁹⁾。それは既に牧畜が行われていたことを証明している。三皇の中の一人の神農は鋤を發明し、人々に農耕技術を教えていた¹⁰⁾。考古学の数次にわたる米と粟の発見により、父系制社会では既に人々は稲と粟等の穀物の栽培法を知っていたことが判明した。

1. 「天」と「力」を崇拝する時代

父系制社会は女性にとって変わって男性が社会の舞台で活躍し、中心的な人物となった。女性の役割は抑圧・制約され、女性は崇高とされた社会的地位を失い、人々は自然と生殖に対する崇拝から、「天」と「力」の崇拝へと転じた。「天」は男性の統治者である「帝」の象徴であり、女性に関係のある多くの自然神はすべて「帝」の統治支配に服従した。「力」は権力の象徴であり、肉体の力はその代表である。「古代は力によって争った（上古争干気力）」と言い、強い力を持ち勇敢な人であれば、自己を防衛することが出来た。さらに他の部落を征服することができる。そのうえ、自分の氏族あるいは部落の人々を服従させることもできる。当時は、炎帝と黄帝の争い、黄帝と蚩尤の激しい戦争、帝のために争った共工と颛顼の争い等戦争が続いた。黄帝、颛顼は戦争を通じて軍事酋長の地位を獲得した。浞神時代の各女神は天の一つの神を尊崇した。「天」は人間の「帝」の表現であった。呪術は天と人間の間をつなぐ重要な方法であった。颛顼時代はこの呪術が盛んに行われた時代である。黄帝と蚩尤の大戦で双方が風と雨を呼び、実際に呪術を用いた。蚩尤は雨神を呼び、黄帝を水浸しにし、黄帝は干ばつの神女魃を召集し、洪水を退かせ、蚩尤を撃ち破った。

五帝戦争の時代はトーテム崇拝の対象は三皇時代とは同じではなかった。女媧と伏羲の時代の崇拝は「蛇」であった。例えば伏羲と女媧は双頭の体が一体となって交尾する蛇であった。その後の人々は蛇を女の子を生む夢の兆しと思った¹¹⁾。ここで蛇と女性に関係があることがわかる。しかし五帝時代では諸帝の象徴である紋

章が黄帝氏は雲、炎帝は火、共工は水、太皞は竜であった。いずれも大きな威力を有する自然物と動物の中の神のようなものであった。特に竜に対する崇拝によって五帝時代が威力と勇敢を崇拝し、生殖力を象徴とする交尾蛇を崇拝していなかったと説明している。伝説によれば、竜は500年かかって角が、1000年かかって翼が出来ると言われている。翼を持つ竜は“応竜”と呼ばれ、威力は無限に大きく、大禹を助けて水を治めたことがあった。ただ尻尾で地面を描くと江河になり、洪水を海に流した。「天問」の中に「河海応竜，何画何励」の文章がある。「山海経・大荒東経」には次のように記載されている。「応竜」は一種の神であり、黄帝を助けて蚩尤に勝ったことがある。また夸父を殺したことがあった。「大荒北経」には更に詳しく記載されている。「ある人が青い衣をまとい、名前は黄帝女魃と言ひ、蚩尤は兵をつくり黄帝と戦ひ、黄帝は応竜を州の野に攻めるように命じた。応竜は水を貯めた。蚩尤は風の伯神と雨師を頼み大風雨を起こした。黄帝は魃という天女を地に降りさせ、雨を止ませ、ついに蚩尤を殺した。」当時では竜は天、雲、雨と一つに連なっているものと言われ、また人間の神として、つまり助手であった。天、帝、竜の三つのことは五帝時代に入り、一体となり既に互いに区別できなくなっていた。「竜」は「易経」の中では既に天地と男性の象徴物となった。そのうえ「飛竜在天」の言葉は男性の事業の成功と成就をたとえている。三皇時代にトーテム崇拝された蛇は商、周時代には女性を生む兆しとして蛇を見、蛇は陰の象徴となった。西周の人が夢の兆しで蛇を見ると¹²⁾、女の子を生むとする観念は決して偶然的、随意的なものではない。

2. 群婚から対偶婚にいたる観念の矛盾

父系制社会に入ってから以後、婚姻形態もまた次第に群婚状態から対偶婚へ移り変わった。ただしその中で長い雑婚時代（群婚＋対偶婚）を経験した。「群婚の中に母系制を基礎とした家庭は対偶婚の家庭への変遷し」¹³⁾、この変化は西安

半坡遺跡の母居制から竜山文化の父居制への居住における変遷によって実証することが出来る。しかし女性は「世界的な敗北」の後、両性関係の調和はすぐには崩れなかった。当時群婚の遺風はまだ存在し、女性はこの様な道德観念の束縛をまだ受けてはおらず、野生的性交がよく見られた。このことは後世の人が編纂した有名な五帝感生説話（異物を感じて生まれた伝説）による多くの例で窺い知ることができる。炎帝の母、女登は神竜を感じて生まれたように、黄帝の母附宝は稲妻を感じて、顓頊の母、女枢は北斗七星を回りつづける星を感じ、尧の母、慶都是月を回り続け赤竜と合った。舜の母、握登は虹を感じて、それぞれの半人半神の帝王をみごもった¹⁴⁾。これらの帝王のすべては竜、稲妻（古代人は稲妻でも竜の力によるものと認めていた）、虹の化身である。これらによって前述の竜に対する崇拝は五帝時代に発生したことが再び証明できる。以上の諸例が、無理に創られ後世に伝えられた伝説だとすれば、「詩経」の中で言っているように「簡狄は燕の卵を吞ませて¹⁵⁾、契を生ませ、姜嫄は天帝の足跡を踏んで稷を生ませた」¹⁶⁾。これらの全ては儒教經典のなかに極めて明白に書かれている。さらに屈原はこう質問をしている。「簡狄が帝嚳に会って性交し、契を生んで、またそれと燕の残した卵とは何か関係があるのか」¹⁷⁾。これらの伝説は、まさに五帝時代が両性生活また群婚の遺風を残していたことを説明するものである。世系の領域においては五帝時代は母系から次第に変遷し、父系への移行の時代であった。五帝時代の姓をみると黄帝の姓は姬、炎帝の姓は姜、舜の姓は姚、その他の姓は多くは姁、妣、姁、妣……のように女遍であり、この氏から分かれて出た姓は男性を中心としたものであった。

この変遷の時期、女性是比较的生活の自由に恵まれていたが、他方では男尊女卑の風俗が徐々に形成された。男の子を重んずる男重女輕の観念は既に日常生活に表れている。考古学の発掘材料は我々に墓の中に両性の差別を提供している。父系社会の中後期の大汶口文化、竜山

文化の墓葬をみれば、よく男女合葬がみられ、ある墓の中では男子は四肢が真っ直ぐ、あおむけの姿勢で、女子は四肢が曲げて、体を横にして、さらに常に妻、妾、女奴の殉葬ですら見られることがある。以上のことは当時父系制家庭が出現し、また男性の地位を尊重し、女性の地位を下にみる状況があったことを表している。その外に世系を継続の中心としてみることから父系社会では既に女性生殖の崇拜から（紅山文化の「妊婦」崇拜）男性生殖器崇拜に移り変わっている¹⁸⁾。祖先に供えられた神物は男性の性器であった。（郭沫若は甲骨文字にある「祖」は「且」であり、「且」は象形文字で男性の性器をまねていると説明している）。実生活のなかで、男尊女卑のパターンは少しずつ形成されていった。＜山海経＞には、北方に犬封国あり、ひとりの女の子がひざまづいて酒食を進めている。女性は不吉なものであるという概念すら生まれていた。「淮南子・斉俗訓」で前述のことを次のように言っている。即ち女性は当時すでに不吉とみられ、女性に出会った時は避けなければならなかったが、男性は放射状の道路上で祓祭を行えば、女性を避けなくてもよかった。これによって当時女性を賤視する風習が開始されたとみることが出来る。

3. 公の国家から個人の国家への激変と女性の地位の下落

五帝時代の舜と禹は一大転機の時代であった。とくに禹が帝王になった時、典型的な一夫一妻制の家庭が既に形成されていた。私有制の出現にともなって、父系相続の問題が目立つようになった。社会権力の集中とこれによる利益、これらの身を高位に位置させる帝王にとって大きな権力を失いたくなかった。禹と徐山氏女の結婚、禹の息子が破天荒に行った「世襲制」はこの一大転機の象徴であった。禹が徐山氏女を妻にめとったのは、既に完全に自然の本能の欲望、あるいは男性の歓楽を求めるものだけでなく、主体的な財産相続の社会的動機があったとみられる。天問の中で次のように説かれている。

屈原の問いの中に「禹と徐山氏が結婚したのは「厥身」に嗣がせるためであったのであるなら、何故前の帝王と同じように快樂にこだわっていなかったのか？ 答えはただ一つ、そうさせたため、即ち時代が彼にそうさせたのである。禹と彼の前の舜の婚姻の観念は非常に異なっていた。舜は尧の次女である娥皇を嫁とり、それは決して孟子が言うように美化されたようなものではなかった。「舜は知らないうちに妻を嫁った」、「只妻を求めた」、このことは逆に前妻を捨てて既に再婚し、自分の欲望を満足させる一時の快樂のためにである。このことは山海経・海内北経に記載されている。「舜の妻登比氏」はその証拠であった。禹は自分の子をつくるために結婚しただけではなく、自分から生まれる本当の子を要求した。まさにエンゲルスが言ったように「一夫一婦制は自然条件に基礎をおくのではなく、経済条件に基礎をおくものである。即ち私有制は原始的自然に生まれた共産制に対する勝利を基礎として最初の家庭を形成したのである。夫は家庭の中で統治の位置に位し、また子供を生み、育てることは彼自身の財産を継承することを意味した。このことはギリシャ人が素直に公表した単婚制の唯一の目的である」¹⁹⁾。禹と徐山氏が結婚して啓を生んだが、禹はこのことは気に入らなかった。禹は自分で言っていた。啓は私が徐山を嫁とってすぐに生まれたので自分の子ではないと言った²⁰⁾。ただし啓はやはり禹の位を嗣ぎ、華夏民族の初めての国家の第一代の君主となった。これも時の流れによるものであって、家庭と私有制の発展は必然の結果である。この単婚制の相続は禹が創始者であり、中国歴史の新しい一頁を開いた。このとき中国の前史時代の歴史は終わり、中国女性の隷属の歴史が始まった。

後篇

男性中心社会の女性観 一男尊女卑

第3章 男女平等の崩壊

1. 文明開始時代の女性観

(1) 性欲の奴隷化の始まり

中国の文明社会は一般に夏代から始まったと言われている。夏代は中国に始めて「天下為家(天下を家とする)」の国家であったが、その時代は「奴隷国家と氏族制が並存」していた時期であった。また多くの村落は夏政権と対立して並存していた。始めての天下の君主となった启は情欲にまかせ享楽と女を欲しいままにした。このようにして女性は権力を持つ男性の「性欲の道具」として下落しはじめた。彼女らは争奪の戦利品とされ、輪番に楽しみの対象となった。

启は女と享楽に溺れ、国の政治を荒腐させ、政治に専念しなかった。山海経に前述のことは説明されている。「夏の王である启は3人の女官を天帝に奉り、九弁と九歌(楽名)を手に入れて(天)から帰った」²¹⁾。屈原はまた説いている。即ち「启<九弁>は<九歌>を手にいれて彼の息子、太康は父の女性を寵愛した」²²⁾。その結果、国を滅亡させる苦しみをもった。启が死んだ後、東方の部落、貧しい国の首領である羿が太康を殺し、彼の子孫をも追い出した。尚書・夏書の中に「五子の歌」があり、このような启から太康までの教訓を痛惜して総括している。歌では次のように言っている。「内で女にこだわったら、滅亡する、外では猛獣が氾濫したら国が滅亡する」女性と猛獣を同じように考え、いずれも国を滅亡する禍のもとと思われていた。启は美しい妻の封孤氏を持ち、羿が夏の政権を滅ぼした後、启の子を殺した。と同時に启の妻、封孤氏を奪った。羿が権力と美しい妻を手にいれた勝利の喜びに浸り、毎日獵をして遊んでいるのを彼の部下寒浞は長い間羨ましく思っていた。羿が野外で獵をしている間を利用して、寒浞はまた封孤氏を無理やりに我が者とし、羿を殺し、権力を奪った。少康(太康の子)は夏国を奪回するまでに、夏国の初期の混乱を終わら

せた²³⁾。封孤氏は一女三夫を妻にする権力を奪った。女性はあちらこちらから取ったり、取られたりして、権力や武力に従って、男性の性欲の奴隷にされた。

(2) 乱交的婚姻

一夫一婦制の家庭が確立した初期、雑婚は否定されたが、そのことは家庭内部の乱交のかたちで頑強に表れてきた。夏代においては弟と兄の嫁が同室、母と子の同淫に類した事件はしばしば発生した。たとえば<天問>の中には澆と兄嫁の女岐は同奸(注「九子之母」の女岐ではない)の事実が記載されている。澆寒浞と封孤氏との間に生まれた子、女岐は封孤氏と羿から生まれた子の妻で、同じ義母兄弟で淫らな女であった。<天問>には又さらに、人を驚かせる乱婚事件があったことが記載されている。すなわち商の先祖、王亥と有易氏女は関係を持ち、捕らえられて殺され、有易氏女は逃げ出した。王亥の弟、王微は有易子女と密通した。王亥は有易子女から生まれた王微に対しさらに乱倫を欲しいままにし、生母と関係を持った。屈原<天問>において、この一連の恐ろしく驚くような「桃色事件」を「有易牧豎、云何而逢？ 擊床先出、其何所从？……昏微尊跡、有狄不寧。何繁鳥萃、負(婦)子肆情？」と述べている。

前の4句は有易氏女が王亥と関係を持ったこと、王亥が殺された事実、後の4句はさらにバカな王微を書き、王微は前代の悪質の行為にしたがって、あえて自分と母親との関係を欲しいままにしている。この乱淫行為は当時においても非難された。これによって一夫一婦制が事実となった後でも女性の帰属問題は極めて敏感な問題であることがわかる。当時厳格な道德規範はなかったが、既に利害的衝突はあった。男性自身とその宗系は、本氏族の女性が自分の夫以外の男性と性関係をもつことを許さなかった。乱交と群婚は同じではない。群婚は女性を中心としての自由な結合の自然形態であるが、乱交は逆に男性の性欲支配下の性的行為であり、女性は往々にして被害者である。これも女性の地位の低落であり、男性性欲の奴隷に落ちおれた

象徴の一つである。

(3) 政治闘争の犠牲者

夏代においては、女性は男性の性欲の犠牲者となっただけでなく、また時にはさらに男性の政治闘争の犠牲者にさせられた。〈国語〉にはこのような史実が記載されている。「昔、夏桀は有施の国を征伐し、有施の人は夏に妹喜という女を送った。妹喜は寵愛され、伊尹によって遂に夏を滅ぼした」²⁴⁾。〈天問〉と〈国語〉では言い方が違う。屈原が言うには妹喜は前もって商湯と伊尹に計画させた「美人計画」の餌として更に夏の国に送られた。妹喜は商湯と伊尹の意向に従って夏桀を酒と女で耽溺させ、自滅させ、死後、国を滅ぼし、彼女はついに商湯により南巢へ追放された。屈原の妹喜については異議を唱えている。「妹喜は勝手にやったのか、湯はもっとすごいですよ」と激しく「女禍論」を覆した。このような女性妹喜は彼女自身君主になりたかったのか、又なりたくなかったのか、女の体で夏を滅亡させた。すべては政治的犠牲者と男性の性欲の奴隷であった女性を反映している。

2. 商代：崇母性遺風の一時的回復

商部族と夏部族は文化の根元において同じではなく、女性観の面で商の人びとは母系制社会の遺風をより多く残している。商代の「女性崇高観の一時的回復は歴史的過程の中で輝いている。

(1) 自然崇拝と女性崇拝

前述のように、母系制社会の自然崇拝における多神論と女性尊重の実際生活とは密接に関係している。商の時代においては、自然的多神論の崇拝の影響にもとづき、殷時代の墓の中に「卜辞」という書物があり、その中の多くの項目に太陽と月は「東母」、「西母」とよばれる。商の人は太陽神を非常に崇拝しており、定期的に祭祀を行った。「卜辞」の中には「出入日、歳三牛」、「庚子卜貞」、「王賓日亡無」という話があり、これは自然崇拝の明らかな証拠であり、崇拝の対象がまた女神に昇華している。

(2) 哲学的観念における女性優先

商の時代を反映して、哲学の成果を用いた「占ト（うらない）」の易書「帰蔵」は女性を代表する坤卦（陽性）は男性を代表する乾卦のまえにおかれている。これは「周易」と相反している。孔子はまた商の時代の易書を見て、次のように説いている。私は商の時代のことを色々研究したかった。このために夏の国へ行ったが、それには満足していない。しかし「坤卦」を得た。坤卦の中の内容と夏の時代の内容が解るようになった²⁵⁾。ということは孔子が夏、商の制度、観念を研究し、商の時代の易「坤卦」と夏の時代「夏時」等の書物を読んでいたことになる。「坤卦」は「帰蔵」の別名であり、「坤」は「乾」の前に置かれている。この種の世界観は商の時代の男女生活のあらゆる領域に浸透し、婚姻、祭祀、相統等国家の基本的制度の中に包括され浸透していた。

3. 婚姻、家庭、政治生活における女性重視の観念

(1) 婚姻制度

商の時代、31の世代を通じて、商の祖乙、祖丁、武丁等2～3人の配偶者をもつ者を除いて、その他の者は皆一夫一婦であった²⁶⁾。商の時代の王は嫁取りにおいて嫡妾を持たなかった。卜辞の中で先王（亡くなった王）の配偶者は「壬母」、「壬妾」、「壬妻」、「癸妾」、「丁奭」の分類項目で呼ばれ、実際は「母」、「妾」、「妻」、「奭」と同義語で有り、すべて女性配偶者の呼称である。商の王の妻は相当の権力を持ち、武丁の妻、婦好のように田地財産は持たなかったが軍隊を掌握した女性もいた。

(2) 祭祀、葬送制度

商代の貴族の女性は比較的高い社会的地位をもっており、女性の中には直接政治に参加し国家の政事に参与した人がいた。更に中には小臣（後世の宰相相当職）の要職につく者もいた。彼女たちは祭祀を主宰することもできた。ある女性は国家安全と領土の拡張に対して大きな貢献をした。例えば、武丁の妻の婦好のように兵を率いて西北の羌方との作戦において勝利を得た

者もいる。彼女は武丁よりもさきに死に、武丁後期の卜辞の本の中に彼女に対する祭祀の状況が多く記載されている。その他の妾たちも先王と同じ廟に入り、祭祀をうけることもできた。貴婦人が死んだ後葬式は非常に盛んになり、殉葬品も豊かになった。例えば婦好の墓の中から出土した副葬品だけでも大したものである。有名な司母戊方鼎は彼女を尊ぶ祭祀のために铸造されたものである。

(3) 相続制度

文明社会に入ってから、権力、財産の移転と分配に反映できるのは相続制度であり、これほど敏感なものはない。夏の啓の死後、夏の始め2～3年の混乱を経過し、少康の中興復興を経てから、歴代の夏の王は基本的襲子継父制に沿った相続制度をとった。商代は母を尊敬する特種な背景によって、相続制の多くは兄から弟へ、すなわち「世」と「及」の両方の制度が平行している。商末期の武乙から帝辛（紂王）の4世までに至ってやっと世襲制は固定された。「今王嗣厥徳、罔不在初、立愛惟親、立敬惟長」²⁷⁾。すなわち「愛」と「親」は「敬」と「長」の前におかれてある。いわゆる「愛」は母によって維持された兄弟の間の継続制である。「立敬」は父系を尊ぶ嫡長子相續制を表している。漢人はすべて殷と商制度の相違を総括する時、よくこの問題について論じている。褚少孫は＜史記・梁孝王世家＞で次のように言っている。「殷道親親」、「周道尊尊」、すなわち、「殷道は親を親とする」とは弟を立てることである。「周道は尊を尊とする」とは子を立てることである。周道は王子が死ねば嫡孫を立て、殷道は王子が死ねばその弟を立てる。父、子、孫の継位順序は父系制相続の通則であり、その一方、兄弟の継位順序は母系制の遺品である。

4. 周代初期の男尊女卑観の初歩的確立

(1) 周代初期社会と女性の地位、女性観との関係

周部族の祖先は今の関中一帯に住んでおり、農耕を主として活躍する部族であった。彼らの

先祖の後稷は尧の時代の農官であり、農業技術によって後世尊敬をえた。周の母系制の先祖(後稷の母)姜嫄は炎帝族中の姜の姓の娘であり、炎帝族も非常に早く農耕社会に入っていた。農耕社会の特徴は定住であり、漂泊で定住しない遊牧生活とは異なっていた。農耕は定住であり、生産・生活のために土地の経営と土地に頼る耕作を主な生産様式とする、いわゆる荒種田を開墾し、建物を管理し、家族集落をつくるのが最大の特徴であった。当時、周は経営上・井田制を実行し、それに対応して、政治上経済にに応じて分封制を実施した²⁸⁾。すなわち周の王は全国の土地を自分の支配下に接収し、「方里而井、井九百亩」の方法によって、土地を分割し宗室、貴族、功績によって土地を与えた。

いわゆる「公田」は限られた貴族が祖先の祭祀をする責任を与えるために開いたものであり、「私田」は農夫に田地を分け与えたものである。私田の分与方法は一人の成年男子に百亩の田地を受け、女性には田地を分割を受ける資格はなかった。八つの家と一井(900亩)を共同耕作しなければならなかった。また貴族に対しても交徹税すなわち収穫物の10分の1を納めたのである。「農夫」はまず公田の耕作の仕事を完成する必要がある、これは実際には「農夫」に対して二重の剝奪をするためのものであった。

貴族の分封制度は周の王の地位を維持するために実施したものであり、分封は政治関係と血縁関係の統一体であった。周の王は血縁関係の遠近によって土地を公、侯、伯、子、男に与えた。分封と密接不可分の宗法制と嫡長子継承制である。宗法は周の王の統治を維持するため、更にいっそう深化させるための組織法であり、はじめ土地が与えられた諸侯の息子達は嫡長子以外を除き、他の子は新しい姓(本宗)を授かった。継承の祖の嫡長子は「宗」(大宗)と呼ばれ、大宗の死後「祢」と称する宗寺に入る。継承の嫡長子は「子宗」と呼ばれる。このように屋簷屋を重ね、宗法は網のように厳密に成立しており、宗族の塔のように高くそびえていた。これは周の王の統治の堅実な基礎であった。ま

さに「詩経・大雅・板」のなかで説いているように、諸侯大国は周の王の屏風であり、大宗は諸公を守る高い城壁であった。宗子は城の池であった。壁を倒して城を壊してはならない。周の王は依存する場がなければならない。嫡長子継承制は宗法を中心である。上は天子諸公から、下は大宗小宗に至るまで、すべて嫡長子によって継承された。これは父系制血縁関係にもとずいて尊卑をわける継承関係を法律によって規定したものである。西周初期に商代の「親親制度」から後の「尊尊」継承法が法的に完了した。これは父系制が完全に母系制の残余まで取って代わった象徴であり、また階級関係が既に家族の内部まで深く入り、さらに階級関係が血縁関係の流れの過程にまで利用されている。

西周の一連の政治経済制度と対応して家庭、結婚、男女関係は各種の面に反映されている。商代とは大部異なっている。農耕と定住生活は家族、宗法観をますます強化させ、男尊女卑の価値観を急激に成熟させ、女性に対する評価を急速に変化させた。そして女性を束縛する道德礼教観の傾向が少しづつ現れてきた。

(2) 周代初期の女性観

① 宗法家庭の男尊女卑

詩経「雅」と「頌」の諸篇中に、貴族内における家族の調和と兄弟の団結を賛美するものは少ない。定住と大家族集落の宗法制の生活様式は男性の家庭の中の地位を向上させ、それに反して女性の地位を下落させた。一つの詩が記録されている。家を作り住居を建て、妻をめとり、子を生み育てる。すなわち生育の占いから子の誕生、教育に至るまで子孫繁栄の過程の描写は男重女軽の観念を表現している。詩の中では次のようにその過程を書いている。

……乃占我夢，吉夢維何？ 維罍維熊，維
虺維蛇。大人占之，維熊維罍。男子之祥；維
虺維蛇，女子之祥。
乃生男子，載寢之床，載衣之裳，載弄之璋。
其泣噍噍。朱芾斯皇。室家君王。
乃生女子，載寢之地，載衣之裼，載弄之瓦。

无非无仪，唯酒食是议，无父母治罹。^①

いよいよ子を孕んで、まず占いを行い、夢の兆しを解明すれば、もし熊罍を夢見たときは男の子の兆し、蛇を見たときは女の子が出来る兆し。男女の子どもが生まれたとき、彼女のこれからの運命は既に決められていた。一人は尊貴者になり、(床の上に置き)、もう一人は卑者(地上にほって置く)とされ、一人は璋で遊び、(璋は一種の玉、貴族の男性はすべてを取り仕切り、身分の尊貴を表した)、成長したら家の君主になる。もう一人は瓦で遊び、(瓦は紡、糸をよるための瓦製のもの)、成長したら紡績の仕事をするのが目的であった。女の子は成長したら嫁にならなければならない。饒舌は許されず、ただ食事と酒の用意をし、義母と夫にかしずき、生父母にはただ恥ずかしくない程度でよい²⁹⁾。

② 乾坤の定位(天地の定位)、男女の区別理論

西周人の哲学は「周易」のなかに集中的に表れている。乾坤の定位、すなわち乾が先であり、坤が次にくるという序列は「周易」から始まった。総体的構造は乾が先、坤が後を除いて「周易」の中には女性だけを論ずる卦は多い。例えば、「家人」、「屯」、「婦妹」等である。象徴的に男女関係と生活を論ずる卦は更に多い。「乾」卦の象徴は竜であり、「坤」卦の象徴は牝馬である。乾陽は坤陰を主宰し、坤陰は乾陽に従って万事順調に行く。これは乾卦卦辞「元亨利貞」、と坤卦卦辞「元亨利牝馬之貞」の意味に含まれている。この種の男女の別と乾坤定住観にもとづいて、「家人」のなかにあって男女区別の観念を生み出している。その観念は「無攸遂，在中饋」，「貞吉」である。その意味は「婦女の職分は家で食事を用意し、男性の思いとおりに従い、女性の職分を忠実に尽くさなければならない」。それこそ家庭の平安を保つことである。女は内、男は外の2つの人為的役割分業意識は男子中心の宗制家庭をもって演じられ進められてきた。これにより男として生まれた乾男は女として生まれた坤女を駿賀する思想が生まれた。

③ 賢母と「女禍(悪女、魔女)」—女性社会論理の価値尺度

分封(王が臣下に領地を分与し諸侯を封じる制度)と宗家制度、同族制度による国家の安定と男女区別の理論にもとづいて、周人は上品と下品の2つの女性の明白な価値尺度を持っていた。最も価値あるとされ尊敬された周人の女性の先祖は后稷の生母の姜嫄であった。「大雅・生民」は姜嫄が周の先祖后稷を生んだことを讃美している。もう一つの尊敬される女性は周王朝の建国に貢献した良母賢妻たちであり、このことは「古烈女伝」に述べられている「周室三母—太姜, 太任, 太姒」であり、彼女らは古公亶父(太王), 王季と文王の妻である。彼女達は夫を補佐し(太姜のように), 息子を助け(太姒のように)あるいは礼を守って行儀正しく, 良き胎教により, 良母賢妻により(太姒と太任のように)子を生むことであった。周代の統治者の女性に求めたものは「詩経」(大雅, 既醉)のなかに明白にかかれている。「君子は万代, いやかがやかに……君子は万代, 大命はそが上につかん, つくはいかに? 君子に優れし女与えん, 君子に優れし女与えて, 君子に良き子孫与えん³⁰⁾。「君子」は金と権力の双方を欲し, また金と権力は世代を通じて持ちたい。神が良き女を与え, 良き男を与えてくれ, 子々孫々を生み, 宗家を継承し, これにより金と権力が無限に続くことになる。

奴隷として心から満足し, どんな苦しみ, 叱責にも耐える。貴族のために衣食住の諸条件を提供する女性奴隷こそ貴族の必要とするタイプの女性であった。例えば〈7月〉の中にあるような桑の葉を取り, 桑を紡ぎ, 衣服を作った女奴隷, また夫と共に耕作して食を届ける農婦, また特別に仕事をしながら貴族に楽しみを提供できる若い女性を特に欲した³¹⁾。

西周貴族が最も嫌うのは「以色禍国(性欲のために国を滅ぼす)」女であった。周の武王が商の紂王を討伐する時, 「女禍論(女がすべて悪の根源)」という理論を出した。彼は紂王を討った時の旗の檄文〈牧誓〉の中で「牝鶏之晨, 惟家

之索, 今商王受」伝説³²⁾によって商を滅ぼした後, 女禍(悪い女)の危害を皆に知らせ, 後の人に警告を与えるために, 妲己の頭を高台にぶら下げ, その上に白旗を掛け, 「商を滅ぼしたのはこの女なり」と書いた³³⁾。これは後の人が手を加えたものであるが, 全体からみれば, 周の武王は一人の「女禍論」の指導者であった。このような思潮はすべての上層部に到達し, この傾向は西周末期, つまり周の幽王が国を失うまで続いた。

④ 多妻多子—結婚生育観

継胤伝宗思想(子孫をつくり宗を伝える)の支配下に周人の多くに多妻観を生み, その制度を形成した。周人また商人の一代おきの嫁取り内婚制を変革し, 「同姓不婚(同姓の人とは結婚しない)」を主張し, 族外結婚制を実行した。これは後世に子どもを生んだ時のことを考慮したものである。周人は「同姓相婚, 其生不蕃」(同姓の人との結婚すれば, 多くの子どもは生まれない)の観念を持っていた。正妻を除いて妾をもつ。この妾は正妻と同姓の女兄弟(姉妹あるいは従姉妹)をもった。「周易・婦妹」は周の文王が商乙の女(紂王の妹)を嫁り, 「婦妹」は「嫁少女(幼い女の子を嫁にする)」の意味である。その中で「婦妹以弟」の話がある。これは正に嫁の妹が妾となることである。〈詩経・大雅・韓奕〉は周貴族諸侯の嫁取りの盛大な場面を「諸弟从之, 祁祁如雲, (多くの妾が後に従っている, まるで雲のように)」と書いている。周易の中には多妻の家庭生活の写実がある。例えば「干父之孟³⁴⁾, 貫魚以宮入, 寵, 無不利(一列に並んで魚のように宮内に入る, 寵愛されるが, 何も利はない)」³⁵⁾。このことは一人の男が二人の女を嫁取り, 息子は父親の妾に寵愛され干渉され, 多くの妾妻は代わるがわる夜を交代し, 一人の男に偏した家庭生活を持たないようにした。

多くの妻をもってこそ多くの子どもを生むことができる。〈詩経〉は文王の妃太姒の美德を讃えている。その一つは文王に多くの妾をおくことを許し余り嫉妬しなかったことである。

「則百斯男(百人の男子を生ませり)」³⁶⁾、多くの妾は多くの子をもつことは幸福であった。＜詩経＞の中に多くの子を持つことを讃美する詩がある。

麟之趾，振振公子。干嗟麟兮！
麟之定，振振公姓。干嗟麟兮！
麟之角，振振公族。干嗟麟兮！³⁷⁾
麟^{りん}の趾^{あし}よ 情厚い君がみ子，ああ麟
麟^{りん}の額^{ひたい}よ 情深いおん同姓^{やから}，ああ麟
麟の角よ 情深い御一族，ああ麟

この詩は貴族宗族が子孫が多いだけでなく、また徳が厚く才能を持っていることを賛美している。更にまた多くの子が生めるような祈りの詩もある。

芣苢（摘み草の歌）
采采芣苢，薄言采之，采采芣苢，薄言有之。
采采芣苢，薄言掇之，采采芣苢，薄言捝之。
采采芣苢，薄言袪之，采采芣苢，薄言睨之。

おおばこ^と采れ采れ
ちよいとそれ摘もう
おおばこ采れ采れ
ちよいとそれ采った³⁸⁾
おおばこ采れ采れ ちよいと実を拾え
おおばこ采れ采れ ちよいと実をむしれ
おおばこ采れ采れ つまどって入れよ
おおばこ采れ采れ 裾はさんで入れよ

これは女性達が集まって一緒におおばこ摘みに行く場面である。話によれば、この草は煎じて飲むと多くの子どもが生めると言われている。

⑤ 貞専と防閑—婦人道德礼教観の萌芽

(一人の夫に専念し、他の男性とつきあわない)

道德は歴史上、統治支配階級に奉仕する思想と行為の規範である。男性中心社会においては、女性に要求する道德の基準は必ず男性の利益に

会わなければならなかった。父系宗族を代々継承する必要によって生育は疑いのない一定の父親の子から出生の確実性を要求し、親から生まれた継承者の継承資格によって、彼らの父親の財産を継承する必要があった³⁹⁾。このことによって女性に対しては夫への恒久専一、忠貞不二を要求し、その一方男子自身は多くの妻をめとることが出来、いわゆる貞専なし、したがってここに男女の二重の道德観が生まれた。「周易・恒卦」では次のように言っている。「その徳、貞、婦人吉、夫子凶」すなわち女性に対して貞は良き徳であり、男性が一人の女性に専念することは不吉な徳である。このような方法は男性に取っても良くないことである。「周易」のなかに10年間妊娠することが出来なかった女性の貞専に対して⁴⁰⁾、遠曲に賛美しており、逆に夫が遠くに行った妻にたいしてはこのことを批判している「夫征不復，婦孕不有」（周易屯卦）が記述されている⁴¹⁾。つまり夫の不在中に妻は妊娠してはならないし、子は生まれてはならないのである。

女性を鎖につなぎ、家事と食事を作ることに専念させることだけに満足させるために、男性は女性に対して種々のそれを防ぐ道德を萌生させた。「周易」の作者は家族を持っている男性に対して、自分の妻と妾が他の男性と共に家にいることを防止しなければならず、(閑有家，悔亡)⁴²⁾（周易・家人卦）は家の平穩を保たせるために他の男性との交渉を防止することに目覚めさせ、女性に勝手に欲望のままにさせるのではなく、どちらかと言うと、きびしく女性を管理した。この防閑の方法は家族から不満の声は出たとしても、家門を汚す行為を招かないことになる(家人高高，悔歴，吉，婦子喜喜，終吝)⁴³⁾。

⑥ 伝統的古風の残照

周の初めの女性ますます多くの社会、家庭の各分野において抑圧されたが、自由で余裕のある伝統的古風は未だ残し持っていた。例えば周の人は既に子のある寡婦が嫁になることは悪いことではないと思っていた。「得妾以其子，無咎」（妾を得て子を授かることは恥ではない，周

易・鼎卦)。当時の夫婦関係はまた比較的束縛されていなかったとしても、妻は夫に別れも言わないで出て行くことがあった。このことが夫を悩ませた。「妻の部屋へ入ってみると妻が去っていいことは凶である（入干其宮，不見其妻，凶）」⁴⁴⁾。

夫婦は常に反目し、仇の現象があったが、夫婦間の地位は未だ比較的平等であった。婚姻の分野において売買結婚の萌芽があったが、周易の中に記載されてる「男の方が嫁取り前、さきに嫁の実家に絹の礼を贈り、嫁の家は礼が少ないことを嫌い、言い争いを起こし、その後協議の結果和解で終わる」という記載もある⁴⁵⁾。但しその時男女の関係はまた相互に見ることが出来る。「周易・観卦」では女性が嫁に行く前に、未来の夫を盗見することができる。「窺観，利女貞」ということが記載されている。盗見することは良いことである。「女子窺観権（権力）」と称することにしよう。この様な風俗は春秋の時代に未だ残っていた。鄭国の徐吾犯の妹が非常に美しく、鄭国の貴族である公孫楚ははじめて婚約を許され、その一方公子はまた強行に求婚し、言い争いを起こした。この事件は鄭国の子産に渡して処理してもらった。子産は兄の徐吾犯に決定をゆだね、徐は妹に自分の結婚を決定して貰うと言い出した。二人はきれいな衣服を身につけ、徐家にやってきた。徐の妹が自分の家から見て、自ら公孫楚を婿として選んだことは⁴⁶⁾、この風俗の名残といえる。

要するに、夏・商の両時代と西周の初期はこの中国文明の開始時期であり、物質文明、文化形態の発展にともなって、男女両性の天秤が傾斜し、権力を持った男性は自分の力によって天秤の一端が高く揚げられ、一方において女性は抑圧され、両性の不平等がこの時から男性に意識される時代に入った。

第4章 儒教の女性観

中国2500年余を統治した儒教思想は孔子が創立し、その後多くの儒家（儒教学者）が発展・

改革したものである。歴史を遡って研究してみれば西周の初め奴隷制度が盛んであった時期の礼楽制度、道德倫理は既に儒教の源泉であった。春秋時代に至り、孔子が文献を整理し、学生を養成し、さらに學術書「述而不作」を著述した。これをもって儒家諸派の基礎を築いた。その後戦国時代の後、孟子、荀子等の人により発展し、漢代の董仲舒の改革と注釈を経て、宋代の学者の再發揮によって、ようやく今のような儒教にまで変革してきた。李大釗は次のように述べている。「孔子の学説が2000余年の間中国人の心を支配することが出来たのは、彼の学説が絶大な権威と、永久不変的な真理をもって、中国人の万世師表（何代にも亘る教師の表）」であったことによる。また、経済思想が基礎であったことにより、それが中国2000余年の一貫不変の組織を反映した産物に適應し、経済上その基礎を持ち、大家族制度の表層的構造であったからである⁴⁷⁾。儒家思想は東洋の農業社会の君主専制の産物であり、それは決して聖人らが理想天国から人間にもたらした福音ではなく、世の中を救う万能薬でもなかった。魯迅は「孔子は権力者が奉った聖人であり、孔子の治区の方法は歴代権力者に利用された」と言った。儒家の学説の最大の特徴は倫理、政治、道德の一本化であり、濃厚な政治倫理の色彩を帯びていることである。それはすでに制定された礼制度を用いて上下の等級関係の秩序を規範とし、礼の秩序から国家の礼儀制度を規定し、仁義忠孝の道德の説教と人倫基準を用いて君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友等の関係を規定した規律を用いて卑者を抑圧し、長幼制、死者が生きている人をもって男性が女性を抑圧することを意味した。この思想は卑は尊を越えてはならない、疎外している者は新しい人の間に割って入ってはならない。すなわち尊、貴、賤、長、幼、君、臣（大臣）、父子を主張し、その学説は自分で身を修め、家を繁栄し、国を治め、天下を安定させることであると言った。長い悠々たる中国封建社会の歴史は儒家文化の人々の意識の中に沈澱させられた。何千年にわたり形成された文化的心理状

態、思想意識は決して短時間にぬぐい去ることは出来ない。ただ単に「封建残余思想」の概念がなぜ今まで儒家思想に影響されたかを説明するには未だ充分ではない。

女性観において儒家思想の影響はさらに根深く頑固であった。儒家の男女観は儒家の尊卑秩序大系の基礎の上にたてられたものである。

「三綱」のなかの「夫為妻綱」の「妻」は6つの人倫道德（君臣、父子、夫妻）の中で最低の地位の道德であった。奴隸の地位は必ず奴隸道德に従わなければならなかった。「男尊女卑」、「男外女内」、「三従四徳」等のような女性の価値観と道德、礼教観はまさに儒家思想大系のなかの一つの組成部分である。

儒学の隆盛と没落は女性の命運、女性観と密接に関係している。儒学大致は三起二落の過程を経た。三起とは春秋戦国時代、孔子と孟子が儒教の基礎をつくった時期である。西漢、漢武帝はただひたすら儒教を崇拜し、董仲舒が儒教を発展改革した時期、南宋の時代、朱理学が儒学を継承した時期である。二落とは第一次衰退は東漢末、儒学自身が没落、魏普時代に盛んに行われ、玄学と仏教が導入され、道教の興起により大きな挑戦を受けた時期である。この時期は儒学が自ら天下を統制する局面と呼びかけに応じる力と束縛する力を失った時期で、漢の末から唐、宋の時代まで及んだ。第二次の没落は「理学」自身が人情に違反し、世俗社会と進歩の勢力の二つの交流の衝撃を受けた明と清の時代であった。儒学の隆盛においては人倫の三綱五常（日々深く人と人とを束縛する規則）がますます完備され、学術思想はますます精密さを表している。同時に女性を束縛する制度が更に深く強くなることを意味していた。また女性の地位の低下は儒学の衰退没落によって女性の束縛の軽減を意味されるものではなく、かえって、性の蹂躪の頂点に達した。当然その自覚は苦痛を味わった以後に生まれたが、このことは儒教束縛の比較的少ない社会背景の下であった。

儒教の女性観の伝播浸透の経路もまた儒教その他の観念の伝播と同様に、主に中央および儒

学者の注釈によって伝播、影響を拡大し、さらに絶えず新しい内容に入れ替えられた。要約すれば、儒者の教典は「詩」（詩経）、「書」（尚書）、「礼」（三礼—周礼、儀礼、礼記）、「易」（周易）、「春秋」（魯国編年史、その後に「春秋三伝」—春秋左氏伝、春秋公羊伝、春秋谷梁伝がある）の五経と呼ばれるものに過ぎない。我々はそれらを4つに分類する。すなわち易学、礼学、詩学、史学である。それらは各々独自の発展過程を持っているが、その中で相互に作用、浸透、影響をしており、明白に分類することはできない。

易学は儒教思想の哲学的基礎である。すなわち宇宙感と方法論である。それは天地陰陽の変化の説を用いて男尊女卑の構造の理論的根拠を理論づけている。それは〈周易〉—「易伝」（春秋戦国）—漢代易（両漢）—宋易（両宋）—明清易のいくつかの過程を経て強化あるいは人を騙くまで失墜するに到った。

礼学は婦人道德の礼儀的規範である。儒教經典と歴代女教書が含まれる。例えば〈古礼〉—戦国時代の「三礼」（〈周礼〉、〈漢礼〉、〈礼記〉）—漢代の大・小戴礼記—歴代女教書、漢の〈女戒〉、清の〈女四書〉である。この一脈の継承的系譜は有形の文字と無形の風習により伝播し、女性はこれらの儒教道德、礼教に服従しなければならなかった。

詩学—儒教は男女の教養と移風習俗（昔の伝統を今のようにする）を推進する手段である⁴⁸⁾。〈詩経〉の開始から、儒教はそれを「経夫婦、厚人倫、美教化、移風俗」の手段を用いた。儒家は〈詩経〉の解釈によって夫婦のあるべき方法、充実した人格の形成、正しい礼儀を目的とした。四家詩（毛詩、齊詩、魯詩、幹詩）は四詩〈詩経〉を解説する著作で、そのなかでも最大の影響を与えている〈毛詩〉をはじめ、鄭玄詩教、宋儒詩教、明清説詩に至るまでのすべてが一連の継承されたものである。

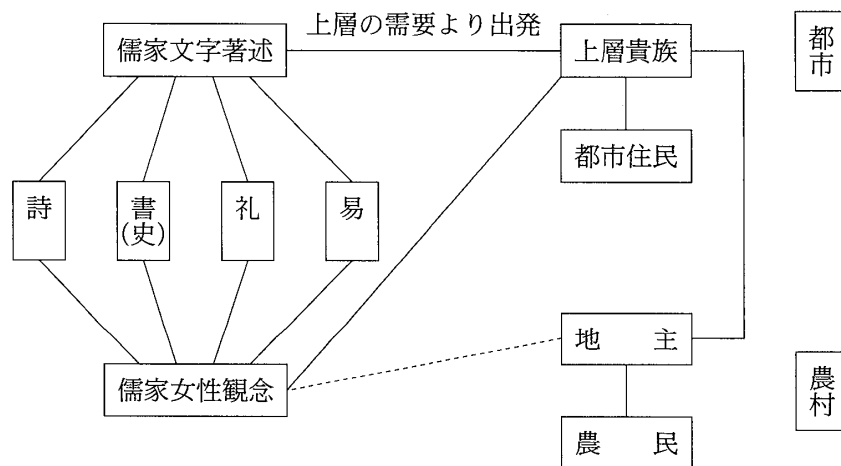
史学—針貶褒獎、恡惡揚善（処罰と奨励）。〈尚書〉—〈春秋〉—「春秋三伝」—二十四史、その中でも「烈女伝」、「后妃伝」のように女性の

歴史に記載されているものがあり、それらは皆一連の儒家正統史の思想を継続している。そしてこれはまた歴代の「母儀賢妃（礼儀正しい母と賢明な妻）」、「貞婦烈女」の石碑を建立して伝えられ、後世の模範とする垂範をたれた。前述の4つのものは相互に交差し影響を与えている。まさに儒教の女性観を普及宣伝し、さらに人の心に深く進入する筋道となり、われわれが現在、儒教の女性観を考察する一つの手がかりとなっている。

儒教の女性観の受け入れについて、我々はま

ず官僚と有名な儒家の著述によって上層階級と独壇的な文化的特権知識階級に影響を与えられ、さらに彼らの普及と自らの実践によって下層民衆に影響を与えた。中国の民衆は常に地位、権力、学識をもって、これを自分の行為の模範とさせられている。しかし中国民衆は権力者と布教者が自分達に対し彼らの提唱する原則を実行するかどうかについては考えてはいない。

下記は儒教の女性観の普及方法の一つを示したものであり、これを用いてこの章のまとめとしたい。



1. 女性の価値観

女性の価値観は2つの意味を持つべきである。すなわち一方は男性の視点に立ち、客体としての女性は主体的地位に立つ男性の側から問いただされる価値、もう一つは女性自ら自主的に主体と客体を分けた女性自身の価値の存在の意味を認識した価値観である。私たちの研究している儒教の価値観は男性を主体として女性を客観視する観念である。儒教学者から見る限り、女性全体の価値は2つの文章で概括することが出来る。(1)「男女居室、人之大倫也（男女が同じ部屋に居るのは人の大倫である）」⁴⁹⁾。(2)「飲食男女、人之大欲（飲食男女は人間の大きな欲である）」⁵⁰⁾つまり、一つは「人倫」の価値、一つは「人欲」の価値である。正統派の儒教学者は人倫

をもって欲望を制し、欲を人倫の中に納め流すことを主張する。但し社会の変遷と思想文化の変化にともなって、儒教的な女性観もまた変化していった。特に封建社会中期と後期において、人欲の時はしばしば人倫の潮流に溺れる傾向があった。世俗化傾向も日増しに明らかになり、命がけで召還した、いわゆる「天理」さえも怒濤のように勢いづいてやってくる人欲を制することは出来なかった。

前編と後編の第1章において、我々は女性の原始時代における崇高な社会的地位とその価値と父系中心社会への移行後の社会的価値の抑圧過程を考察した。儒教の興起は女性の社会史に対して抑圧の理論構成を継続的に完成させ、さらに女性を男性中心社会、すなわち「人倫」と

「人欲」の価値体系のなかに納入させた。それに応じて我々は3つの方向から、すなわち儒教の価値観を探索し研究すること、すなわち女性の社会的価値、女性の人倫的価値、女性の個人としての価値から儒教の女性観を検討したい。

(1) 「婦無公事（女性は公的な仕事に参加しない）」—女性の社会的価値の抑圧

第一章に述べた周時代初期の女性観の中において、すでに周の武王が商を滅亡した後、最初に明確にしたのは「女不干政（女性は政治にかかわらない）」というスローガン（のぼり）を打ち出したことであった。西周の末期には「女禍論」が再び台頭した。春秋戦国時代に至り、孔子、孟子の2人とも女性の社会的地位を認めず、漢代になって「三綱」を既に決定し、女性はさらに社会とは無縁となった。

① 「牝鳴司晨（雌鶏が朝を告げる）」—女性の政治舞台からの追放

周の武王は商の紂王を討伐した時の主な罪状は「婦言是用（女の言うのをよく聞いたものを採用すべきである）」であった。「婦女是用」は女性が間接に政治に関わっていたことを反映している。ただし、これも商代の女性が政治上ある程度の関与をさらにもっていたことも示している。しかし周代に到り、かえって女性が政治に関与することを許されなくなった。西周が国を建国した時に貴族の女性はある程度の働きをした。周の武王はかつてこのような話をしたことがある。すなわち「予有乱臣十人，同心同德（わしには治める大臣が10人おり，同じ心で団結している）」⁵¹⁾，乱臣とは国を治める大臣のことであり，武王を助け商を滅ぼし，天下統一を成し遂げ，10人の採用の中には武王の母である太姒（文母）がいた。これを見れば周の武王は「自分の母」を尊敬したが，逆に紂王の「妻」を卑しいものと見た。「崇母貶妻」はもともと儒教の伝統の一つである。しかし最も主要なことは西周の初期にはまだ多少女性の社会的政治作用が認められていたことを立証したことである。

西周の末年に至って，周の幽王は国を失った。もともと各種の矛盾によって，その危機は必然

の結果であったが，それらの国の大臣達は総て敗戦の責任を幽王后褒姒の身上におしつけた。すなわち「夫をたてれば勝利し，女性をたてれば国を失う」。幽王は多分女性をたてたのが，国を滅ぼす根源であった⁵²⁾。聡明な女は彼女の巧妙な言葉づかいを借りて政治に干渉し，その聡明な女性は饒舌で国を滅亡に導く。戦乱は天から降りてくるのではなく，女性から生まれるものである。結論は只一つ「婦無公事休其蚕织」（女性は政治を離れ養蚕に専念する）⁵³⁾。すなわち女性は蚕職の本分を捨てて，政治に干渉すべからずであった。

この種の観念は孔子に至り，さらに一步進んだ。彼は根本的には女性の政治的作用を認めなかった。周の武王の母，太姒の功績でさえまで総て一掃した。〈論語〉の中にこのような一文がある。「舜は大臣5人をもち，天下を治めた」。武王は言う。「われは補佐する大臣を10人持った」。孔子が言う。「そのようには言えないのではないか。唐虞の盛んであった際，その中には女性があり，9人しか言えない。」⁵⁴⁾孔子は周の武王のために国を治める10人の大臣の中から，1人の女性を除かせたはずである。いわゆる女性は政治に干渉するものではない。孔子時代は女性を軽視することは周の初めよりもさらに深かった。孔子は女性に対する先入観を深く持っていた。彼は既にこのように名言している。「女子と小人は養いがたし」⁵⁵⁾。彼は女性が節度と分をわきまえて政治にはあづからせない。彼はこのような一首の歌を作った。「彼はその女の口からと言っただけで出かけて行った。彼女の申し出によって失敗に終わった」⁵⁶⁾。これは君主の最も可愛がっている女性に反対するものであり「吹枕頭風（枕のそばでささやいて）」，「私謁私請（私的な申し出に反対する）」の意見である。荀子もまた言った。俳優，侏儒（生まれつきの体の小さい人），あるいは女性が何時も申し出るが，それは君主の意志を干渉する大きな弊害である⁵⁷⁾。

漢の儒学者は今でも女性に対する悪い先入観を持っている。常に盛んに言われている「天人

感応（天と人と互いに感じ合う）」、「陰陽五行」の説をもって后妃（妃2人の下の女）の親戚を抑圧した。日食、地震、水害に遭ったときはすべて「陽盛陰衰」に原因すると説き、勢力を得た親戚を抑圧することによって救われた。趙飛燕姉妹は美貌がもとで漢の成帝が気に入って宮中に選ばれた。漢宣時代の披香博士の淳方成は丁度成帝の後に立っていた趙氏の姉妹を見て唾をはいて嫉妬した。「此水也、滅火必矣（これは過ちの水である、火を消すんだ）」⁵⁸⁾。漢は「5徳」の中の「火徳」をもって王となし、女は陰類、「水」の行に属し、美貌の女は必ず王を惑わし、そのためこの2人を漢を滅ぼす「禍水」と称した。その後「尤物移人」（美貌の女は人を変える）、「女人是禍水」（女性は禍をおこす水である）の観念は流れを広げて普及した。それに女性の人格を侮辱した禽獣と同列に取り扱うことであった。女性は国を滅ぼし、君主を惑わせる二つの大害と見なされた。礼記にこのことが記載されており、昔諸侯が天子を朝見したとき、天子のために鳥獣を管理する官吏である大羅氏は鹿と美女をつれて諸侯に戒めを言っている。「好田（畋、狩猪）好色者亡其国（狩猪と美女を好むのはその国を滅ぼす。）」⁵⁹⁾ 亡国に対する中国の伝統的歴史観は次の二つの教訓にまとめられる。すなわち女人禍国と奸臣誤国（悪い官吏は国を誤らせる）である。「女人禍国」の神話はすでに後蜀時代の君主、孟昶の妃、花蕊夫人の一首「逃国亡詩」（国を滅ぼすの詩）において打つことによって粉碎させられた。君王城上堅降旗，妾在深宮那得知（君王の城の上に投降旗を掲げて、私は宮殿深くにいて、なんで知ることができるか）？ 十四万軍齊解甲，寧無一個是男兒（14万の兵士と一緒に鎧にかため、その中に誰一人として、立派な男性があるか）？ また幾人の罪を女性に転化しない誠実な楚霸王の項羽の様な男性がいたか。項羽は死に臨んで虞美人と剣の舞を歌って決別した。山を動かす力をもって、気力で世界を圧倒し、時期が悪く、馬も足りない。馬が走れない、どうしたらよいか。虞美人あなたは何もできないでしょう⁶⁰⁾。ただ

この失敗を運の悪いことのせいにしただけです。虞美人に対しては相変わらず、情が深かった。

「女不干政」と「女人誤国」は多少の理論的根拠を持っていたのか。儒家は単に「易経」、「易伝」の中の「陽陰動静」を用いて解釈している。漢代の大儒家である鄭玄は〈詩経・大雅・瞻印〉のために注を書き、「哲夫成城，哲婦傾城」と解釈したとき次のように説いている。陽は動きであり、故に多くの知識をもっていれば国をたてる。女性は陰であり、陰は静、故に考えが多いほど国を乱す。しかし唐代の孔穎達が〈詩経〉に注を入れた時このような言い方には賛成しなかった。彼はそれを男女陽陰動静に帰するのではなく、謀略の是非に帰するべきであった⁶¹⁾。これはまた唐朝の精神的風潮を反映し、唐代の女性が政治に関与することが流行だとするばかりか、中国の歴史上唯一の立派な事業をとげた武則天も生まれている。新しい社会の風潮と男女両性観もまた孔穎達のような権威者の深層意識を動揺しつつあった。

幾千年の間、女不干渉、女人誤国の偏見が深く浸透している間、珍しい幾人かの貴婦人が政治の舞台に上がって頭角を表した。例えば歴史上、太后摂政の先例を開いた宣太后、南北朝の北魏の馮太后、清代の慈禧太后等は総て一時政権を握った。ただし結局は彼女らの摂政は相変わらず男性の政治的な鎖のなかの小さな一鎖に過ぎなかった。彼女らは独立した女性の人格をもって、取るのではなく、そのために「母后」の身分を持って婚姻、生育の過程を通じて非常時に政界に入ったのである。またすべて基本は王朝の正統をもって統治した。その最も典型的なのが西漢の元后王政君である。漢元帝の死後、彼女は摂政を50年間続け、民族の特権を維持したが、自ら進んで劉の家をもって正統を守ることが自分の使命であると言っていた。

彼女の任務はただ家の天下のために看守人を充当することにしかすぎず、伝承してきた皇帝の玉印を保存することであった。彼女の姪の王莽は漢を腐して自立を決意し、人々を派遣して

彼女が玉印を出してもらおうと強いた時、元王は怒って王莽の漢に背を向けた不義の行為を罵り、わが漢家の老いた寡婦は朝となく昼となく死んでもこの玉印と一緒に葬ると罵倒した。最後は漢が玉印をだして地面に玉印を投げ捨てた。王巖に言った。「自分はもう老いてももうすぐ死ぬ。あなたの兄弟の如く今この一族は滅びるなり」、「班虎でさえ感無量で書いた。王氏の家族が元後の寵愛により国政を60年を持ち続け、このように元後は誠実でこの玉印をにぎり、玉莽に預けたくない」。これはまさに婦人の仁であり、悲しきことであると書いた⁶²⁾。この「婦人之仁」こそ封建時代の女性の夫の家を正統的觀念とする女性の自立的人格を失っている代名詞である。歴史上、ただ武則天は一つの例外であった。彼女は皇后の位を借りて、女帝の玉座に上った。そしてまた朝と時代を改め、年号を新しく設立するような大改革を行った。彼女は政治上の障害を一掃するために一切の抵抗力を排除し、夫、こども、兄弟、愛人、大臣を問わず排除した。駱賓王が徐敬業の替わりに書いた〈武則天を討伐する檄文〉のなかで彼女が「牝鷄司」と攻撃した。武則天はそれを読んだ後、ただ大げさに一笑しただけで、さらに作者の文才を非常に賞賛した。この歴史上の偉大な奇異な女性はまさに女性の本位、強烈な主体的意識を持って政治活動に従事した女性と言えよう。この種の奇異現象はただ繁栄した唐のときに一度現れたにすぎず、それ以後再び表れることはなかった。儒家の男性の天下を統一する政治観は現実社会における女性が政治に参加することを排除しただけではなく、神話を創作する方法をとることを惜しまなかった。天と地が男性であり最初から創られたことを証明したかった。

秦漢以前の神話伝説に女禍補天の功績が記載され、東漢の末頃応劭の〈風俗通〉には女禍が人を創った神話が保存されている。三国時代に至って盘古が世界創世神話をわざと創った。この神話は最も早く書かれたといわれる三国時代の呉国徐が創った〈三五歴記〉に書かれている。これ以前の典籍には全く記載されていなか

った。その中で「天地は鶏子のように混沌としており、盘古はその中で生まれた。一天八千歳。天地は開かれ、太陽は天のために清く澄み、月は地のために濁った。盘古はその中にいた。太陽と天は一丈の高さ、地と天は一丈の厚さ、盘古の日の長さは一丈であった」⁶³⁾とされている。盘古の創世神話の人づくり伝記と争ったわけである。これは正に女性が社会的に完全に排斥にあったことであり、家庭の中でますます軽蔑されていく現実と状況に相呼応するものである。

② 「在中饋（中饋に入り）」「務蚕织（蚕织に努める）」—女性の役割分業

女性に対し政治的なことは問われなかった。「牝が晨を告げれば家が傾く」、「女性は公事なくして蚕织に就業する」女性の職業はただ「自分の願いに達するため低い欲望を持ち台所で仕事をのみ」、「非なく議なし、ただ飲食が議論」に従事すべきであった。儒教經典はまた上から下までの男女両性の分業を規定した。まさに社会、家庭、経済、政治の全活動を内外の二つに修めた。政教上の分業は以下のことである。

すなわち古くから国王は6人の女官、3人の夫人、9人の妾、27人の「世婦」、81人の「御妻」をもって、天下の内政を修め、女性の道徳を明白にした。国王は六官を持ち、3公、9卿、27大夫、81元士、これをもとに外を治め、これを持って男の教えを天下に示したのである。国王は男の教えを聞き、皇后が女の教えを聞く。国王は陽の道を治めととのえ、皇后は陰の徳を治め国王は統治を聞き、皇后は内職をきく。上層の内外分業はこのように確定した。「外」は国を治める大事、「内」はただ女性の従順を教えることで政治的権利にあづかることではなかった。

〈白虎通〉で説かれていることは「女性は政治に専業する責任がなく、下人を管理する責任を持ち、外対接待の責任等で公的な交際はなく、台所において食事を作る役割である」⁶⁴⁾。経済活動についても〈礼記〉は規定している。王諸侯は籍田を持ち毎年立春になると、これをもって農業と養蚕の仕事を勧め、耕作を象徴する行事

を行い、皇后は養室を持ち、桑をとって養蚕をし、衣服をつくり天下の人々に養蚕を奨励した⁶⁶⁾。

男は耕し、女は織るという形式は最上層から下層までに規定されていた。下層の小民である百姓は政治上“君子に治められている小人であり、「匹夫（ただの男）」にすぎず、直接に外の

統治をうけるしかなく、「匹婦」の間接に統治されて、家の中に閉じこめられ、家事をやらされていた。経済生活中で「百亩の田」は匹夫の耕すものであり、「五寅の屋敷は桑の垣根で囲まれ匹婦が養蚕をする」⁶⁷⁾、この幾千年を通じて変わらぬ分業様式は次のように示すことができる。

男女の伝統的分業様式

性別		男		女	
階級		国王貴族	男	皇后夫人	女
活動部門	経済	農蚕業の管理	農業と桑の木を植える	養蚕の奨励	養蚕の仕事
	政治	6官を設置し外事を治める国王が無ければ内治される小人を治められない	食べる人は貴族に治められる	6官に率いられ女性の教えによって内治する	
				女性に公事なし	

このような役割分業は後世改変しなかったばかりでなく、ますます女性の内という分業を強化した。宋代の倫理学の先駆者となった張載は〈周囲・家人〉という卦の解釈において「家道の始まりは種々の飲食、調理に始まる。家人の道は調理にあり。一家の家政管理は楽しいかどうか、平和かどうかにより、皆全てはこれにつける」⁶⁸⁾。一家の家庭的安定、快楽は全て台所にある。食事の準備という女性の調理の如何による。これは、そのために封建時代中後期に家庭がますます強化され、国を治め、天下を安定させる社会基礎となったことを意味する。男女両性の役割分業は随の時代にさらに強化され、中国11世紀における最も偉大な改革家である王安石でさえ、女は家庭内のことに服し、一方男は外で仕事をする。この服従の分業様式を賛美している。また〈詩経・七月〉の中で、奴隸的な悲惨な生活を男耕女織の楽園のように一種の上下関係を曲解して扱う序をもっている⁶⁹⁾。代々この一つの規範を破る政治家や改革者は一人もいなかった。それは中国封建社会の経済様式、この分業様式を決定したためである。ただし、

〈鏡花縁〉の中の幻想的「女兒国」の中で、この伝統的役割に徹底的に反対し、女性は政治、経済、商業、土地を耕し、男性が家を守り紡織することはあくまでも一種の「ユートピア」の幻想にすぎなかったと述べている。

(2) 「男女同室、人之大倫（男女同居は人間関係の倫理）」—女性の倫理価値

正統の儒教は倫理的婚姻家庭観を最上の位置においていた。婚姻家庭は延続之倫、すなわち婚姻家庭は永久に終わりがなく、子子孫孫まで続き、継続血統化する目的を実現することだけでなく秩序之倫理でもある。すなわち男女老幼、上下尊卑、のりを越えず、統治秩序のゆるやかな細胞となることであり、また拡張之倫理、すなわち二つの家の婚姻関係を通じて二つの親族関係を結ぶ(家と家との結婚)、女方の親族関係が多く自分の自分と血縁関係ではない人と親族関係を作って社会に進出して行く先姻形式であった。これらの全ては女がいなければ方法は実現できなかった。つまり、「男女同居」は「人の大倫」の発端であり、すなわち夫婦は人倫のなかで最も重要なものであった。よく言われている

「夫婦の倫」は具体的に内函と位置も一定不変のものではなく、それは自然に社会的地位によって表れ、社会倫理へ変化する傾向にある。強調された夫婦の倫の「三礼」の時代は“五常一君臣，父子，夫婦，兄弟，朋友の諸関係のもつ「五者之合」（五者の合わさったもの）である。漢代，国家が強化されるに従って，君主の権力が高くなってから，家庭社会の上に国家の絶対的権威を維持するために，「五紀（五常）」，「三綱」をもって，夫婦の自然の関係を君子，父子関係の下に権力をもって置き換えた。それにしても宋代「齊家」がまたしても強調され，目的のために権力をもって置き換えさせられた。言われることは漢代既に築かれた婚姻，家庭，人倫の関係の規範を基礎とし，その後小さな修正，小さな変革がなされただけである。つまり「齊治論（家と国を治める道）」の系列の中にある儒家にあっては，女性の要求する価値基準は女は孝を重んじ（孝敬父母），婦徳を重んじ（貞専柔順，三従四徳），母の教えを重んずる（教育子女）ことである。婚姻家庭はまさにこの価値を表す道とその據点であった。

注

- 1) 柳宗元：＜封建論＞
- 2) ＜淮南子・覽冥訓＞
- 3) ＜山海經・大荒西經＞
- 4) 応劭：＜風俗通＞，今載＜太平御覽＞七八
- 5) ＜山海經・海外北經＞
- 6) ＜マルクス・エンゲルス選集＞第4巻，第32頁注
- 7) エンゲルス：＜家庭，私有財産，国家の起源＞第4版序言
- 8) エンゲルス：＜家庭，私有財産，国家の起源＞第54頁
- 9) ＜易・系辭下＞
- 10) ＜易・系辭下＞
- 11) ＜詩經・小雅・斯干＞
- 12) ＜詩經・小雅・斯干＞
- 13) エンゲルス＜家庭，私有財産，国家の起源＞
- 14) 轉引＜尚書正義・序＞
- 15) ＜詩經・商頌・玄鳥＞
- 16) ＜詩經・大雅・生民＞
- 17) ＜天問＞
- 18) ＜山海經・海内北經＞
- 19) エンゲルス＜家庭，私有財産，国家の起源＞第62頁
- 20) ＜史記・夏本紀＞
- 21) ＜山海經・大荒西經＞
- 22) ＜離騷＞
- 23) ＜天問＞，＜離騷＞，＜史記・夏本紀＞
- 24) ＜国語・晋語＞
- 25) ＜礼記・礼運＞
- 26) 王国雄：＜殷周制度考＞，轉引自呂羽：＜殷周時代的中国社会＞第106頁注
- 27) 尚書・商書・伊訓
- 29) ＜孟子・勝文公上＞
- 29) ＜詩經・小雅・斯干＞
- 30) ＜詩經・大雅・既醉＞
- 31) ＜詩經・閔風・七月＞
- 32) ＜尚書・周書・牧誓＞
- 33) ＜古烈女伝：荃嬖＞
- 34) ＜周易・蛊卦＞
- 35) ＜周易・剝卦＞
- 36) ＜詩經・大雅・思齊＞
- 37) ＜詩經・周南・麟趾＞
- 38) ＜詩經・周南・芣苢＞
- 39) エンゲルス＜家庭，私有財産，国家の起源＞59頁
- 40) ＜周易・屯卦＞
- 41) ＜周易・屯卦＞
- 42) ＜周易・家人卦＞
- 43) ＜周易・鼎卦＞
- 44) ＜周易・困卦＞
- 45) ＜周易・小畜卦＞
- 46) ＜周易・賁卦＞
- 47) 李大釗「由經濟上解釈中国近代思想變動の原因」（「五・四時期婦女問題文選」，三聯書店出版）
- 48) ＜詩經・毛詩序＞
- 49) ＜孟子・万章上＞
- 50) ＜礼記・礼運＞
- 51) ＜尚書・周書・秦誓＞
- 52) ＜詩經・大雅・瞻印＞
- 53) ＜詩經・大雅・瞻印＞
- 54) ＜論語・秦伯＞
- 55) ＜論語・陽貨＞
- 56) ＜史記・孔子世家＞
- 57) ＜荀子・王霸＞
- 58) ＜飛燕外伝＞
- 59) ＜礼記・効特性＞
- 60) ＜史記・項羽本紀＞
- 61) ＜十三經注疏・毛詩正義＞
- 62) ＜漢書・元後伝＞

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 63) <太平御覧二> | 67) <孟子・尽心上> |
| 64) <礼記・昏義> | 68) <横渠易説・家人> |
| 65) <白虎通・論婦人之費> | 69) <詩義鉤況・幽風・七月義> |
| 66) <礼記・祭義> | |